

# 女子大國文

第百五十四号

平成二十六年一月発行

女子大國文 第百五十四号

平成二十六年一月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百五十四号

平成二十六年一月十五日 印刷  
平成二十六年一月三十一日 発行

〒605-8585 京都市東山区今熊野北日吉町五番地  
編輯兼 発行者 京都女子大学国文学会

電話 〇七五-五三一九〇七六  
FAX 〇七五-五三一九一二〇  
振替 〇〇〇〇-五-三一三四

〒606-8604 京都市上京区上長者町通黒門東入  
印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇七五-四一四一〇八代  
FAX 〇七五-四三三六二八二

肥前島原松平文庫蔵『間狂言』（一冊）について：川島朋子（一）  
——京都大学大学院文学研究科図書館蔵『大蔵流物間語』との関係を中心に——

源氏物語総角卷における「暁の別れ」と漢詩文……朝日眞美子（二五）  
——「遠情」がもたらす表現——

〔資料紹介〕  
京都女子大学図書館蔵『都の花笠』……正木ゆみ（六〇）  
——享保五年正月刊『役者三蓋笠』京之巻の原題簽の出現——

〔資料紹介〕  
蝠翔斎弘度編輯『教訓古今道しるべ』六種……八木意知男（七一）  
彙報……（八五）

京都女子大学国文学会

# 彙報

優秀論文発表会（五月十一日）発表要旨

## 二〇一三年度国文学会行事（後期）

### ○公開講座

十月十四日（月）午後二時四十五分より四時十五分。

講題 万葉集の恋の歌

講師 京都大学大学院文学研究科教授 大谷雅夫氏

### ○国文学会旅行（秋季）

「京都の秋に旧邸をめぐる」十一月十日（日）午後

行先 山紫水明処・京都市歴史資料館・廬山寺・梨木神社・

閑院宮邸跡。

参加者、工藤・峯村・中前先生、学生十三名。

『万葉集』巻五における「子等を思ふ歌」について

— 憶良の作品にみる『維摩経』の思想 —

堀川 奈津子

本論文の題目は『万葉集』巻五における「子等を思ふ歌」について―憶良の作品にみる『維摩経』の思想―です。万葉集は一般的に歌集とされていますが、実際は歌だけでなく漢文や漢詩等も収録されています。私は三回生のはじめ頃から万葉集の漢詩文に着目して卒論を書きたいと思っていました。そこで、自分にとって最も馴染みのあった山上憶良の作品を日本古典文学全集などで一通り読んだ後、中心作品を「子等を思ふ歌」の序文にして研究を始めました。最初に憶良や「子等を思ふ歌」についての論文を読み、この作品についての何が論点になっているのかを掴みました。その論点の中の一つを選択し自分なりに『維摩経』という視点を加えることにしました。

山上憶良は『万葉集』巻五を中心に多くの作品を残していますが、他の万葉歌人とは異なるのが、自身の仏教思想や漢詩文の素養を作品に反映させたという点、生と死を深く見つめるなど独自の視点、方法で作品を残したという点です。他にも彼の作品の特

徴として、仏典や漢詩文などの中国文学の影響がみられること、生老病死を主題としたものが多いこと、更に多くの「子等」を詠んだ作品があることが挙げられます。作品の主題に「子等」を用いたという特徴が際立っているためか、憶良は一般的に「子煩惱の歌人」と認識をされていることが多いようです。確かに憶良は子煩惱であったかもしれませんが、しかし、私は憶良が「子等」を詠んだ根拠を単に「彼が子煩惱であったから」と片付けてしまうのは、彼の深い教養についての考察が不十分になってしまうのではないかと感じました。「子等を思ふ歌」には豊富な知識を持っていた憶良にしか得られなかった思想が影響している可能性が高いはずです。

憶良の作品には仏典を引用しているものが多く、彼の思想にも影響を与えているはずだと考え、『維摩経』の思想との関連を調査しました。『維摩経』に焦点を絞ったのは、憶良がかつて東宮侍講として仕えていた聖武帝の后が藤原氏出身の光明皇后であり、その藤原氏の氏寺である興福寺では『維摩経』を講じる法会「維摩会」が行われている等、『維摩経』は憶良にとって関わりが深い仏典だと考えたためです。その『維摩経』でも特に「文殊師利門疾品第五」を「子等を思ふ歌」（巻五・八〇二、八〇三）の序、同じく「子等を思ふ歌」八九七との関連性を明らかにし、憶良の

作歌意図や彼が『維摩経』から受けた影響を考察しました。

巻五収録の「子等を思ふ歌」は漢文による序文、長歌と反歌により構成されています。長歌と反歌は有名ですが、序文の存在はあまり知られていません。ここでは、「(釈尊が)衆生を等しく思ふこと羅睺羅のごとし」や「愛しびは子に過ぎたりといふことなし」のように、子への愛情を誇張するとも思われる表現があります。先行研究では、憶良が子への愛情を高揚しようと作られたとしていますが、私は、仏教思想に多く触れていたはずの憶良が煩惱である愛情を全面的に肯定したと考えて良いのだろうか『維摩経』に影響された部分がないかと考えました。

その『維摩経』の中でも特に「文殊師利門疾品第五」を扱いました。病床にある主人公維摩詰を文殊菩薩が見舞い問答をするという、この経典の中心部分です。ここに「諸の衆生に於て、これを愛すること子の若し」という、八〇二序の一部に似ている部分があります。しかし、この指摘だけでは憶良の思想に『維摩経』が影響しているとするには弱いので、次に憶良のもう一つの「子等を思ふ歌（八九七）」からの視点も付け加えることにしました。八九七に「五月蠅なす騒ぐ子どもを打棄てては死には知らず見つつあれば心は燃えぬ」という、憶良自身の身のはかなさを知りつつも、養育者である自分が死ねば苦しむことになる子どもたち

のため、この世に身を留めるべく長寿を願っている部分があります。これが「門疾品」の「菩薩は衆生の為の故に生死に入る」（菩薩は衆生を救うために苦しみの生死の世界に身を置く）と類似しているため、最初に提示した八〇二序との関連を踏まえ、「子等を思ふ歌」に『維摩経』による思想の影響があると考えました。

「子等を思ふ歌」での憶良は自分の子どもへの愛情が、「門疾品」での菩薩は衆生への愛情が扱われています。しかしこの二つの愛情は、憶良は煩惱によるもの、菩薩は衆生を救うという悲願・大悲心によるもの、というように性質が根本的に異なります。よって最初に紹介した八〇二序は、先行研究にあったような憶良が子への愛情を全面的に肯定するために詠まれたのではなく、自身と菩薩の愛情の違いを示すことで、人間の煩惱にとらわれている姿を客観的に描くために詠まれた、憶良の深い知識による『維摩経』思想の影響によって詠まれた作品であると見ることができます。論文の内容については以上です。論文は一定期間寝かせる（忘れる）ことで、次の方向性が見つかり更に深めていくことができます。その時間を確保するためにも、なるべく早めにテーマを決定し、調査を始められるよう頑張ってください。

## 『華嚴縁起』『元曉絵』第一巻の詞書について

— 『宋高僧伝』との比較 —

福山 久美子

『華嚴縁起』『元曉絵』は、明恵上人（高弁）によって鎌倉時代初期に華嚴宗の道場として再興された高山寺を背景にして制作された絵巻物で、新羅国華嚴宗の祖師である義湘と元曉の行状を描いたものである。『華嚴縁起』『元曉絵』は『宋高僧伝』『唐新羅国黄龍寺元曉伝』を翻案したものであり、物語の大筋は同じだが、目的に合うように改作された部分がある。先行研究では、『元曉絵』には、明恵と元曉を重ね合わせる意図があったとする説が有力視されている。

そこで、本稿では、『華嚴縁起』『元曉絵』第一巻の詞書と『宋高僧伝』『唐新羅国黄龍寺元曉伝』との比較を行い、元曉についての記述を実際の明恵の姿に近づけ、『元曉絵』の観覧者が明恵を元曉に投影しやすいようにした可能性がある改変部分について、その根拠を挙げて考察を深めた。

本発表では、特に、第二章第一節「因明、内明、内外の典籍」と第二章第四節「沙門・非人」の内容を取り上げた。

### ◆第二章第一節 因明、内明、内外の典籍

「元曉絵」第一巻第三段では、元曉について「因明、内明、内

外の典籍、凡て通解せざることを無し」とあるが、『宋高僧伝』には、「三学之淹通」(三学に広く通じていた)とあるのみである。「因明、内明、内外の典籍、凡て通解せざることを無し」の記述が創作されたのは、明恵が因明・内明を学習し、高山寺に外典を含む多数の典籍が所蔵されていたためではないだろうか。

施無畏寺蔵『高山寺明恵上人行状』(仮名行状)にある

建久ノ比、白上ノ修行思ヒ企シ時キ、因明ノ法門イマタ師訓ヲウケス、子嶋四相違私記一遍コレヲ談スヘシ、仍林観房ノ法眼聖詮ニ対シテコレヲ受学ス、〔後略〕

という記述や、上山勘太郎氏蔵『高山寺明恵上人行状』(漢文行状)にある

〔前略〕幼年当初従リ俱舎頌ヲ読ミ始メシ、志サス所偏ニ聖教の深旨ヲ得エ、名利ノ繫縛ヲ思フ離ルルコト、遂則大小権実顕密ニ教、因明内明悉以テ学習ス、

という記述から、明恵が因明・内明を学習していたことがわかる。また、高山寺典籍文書綜合調査団の調査によると、高山寺には鎌倉時代から多数の典籍が所蔵されていた。その中には、内典である仏教経典はもちろん、『論語』や『史記』の写本等の外典も含まれ、現在まで伝えられている。また、高山寺経蔵に現存する鎌倉時代書写の聖教目録には、漢籍や仏教経典以外の国書も記載

されている。

これらのことから、「因明、内明、内外の典籍、凡て通解せざること無し」の記述は、明恵を元暁に投影するねらいから書き加えられたと考えられる。

#### ◆第二章第四節 沙門・非人

「元暁絵」第一巻第四段には、「元暁法師は行儀測るべからずと雖も、聡明有智の沙門なり」「左様の非人必ずしも御請あるべきに非ず」とあり、元暁を仁王経大会に招こうとする王とそれを阻もうとする愚臣のやりとりの中身が書かれている。それに対して『宋高僧伝』では、「諸徳悪其為人。潜王不納」(多くの高僧は元暁のひととなりを憎み、王に悪口を告げて仁王経大会に呼ばれないようにした)とあるのみである。

元暁を表す言葉として、「沙門・非人」という肩書きが使われたのも、明恵と関連づけるためだと考えられる。明恵が高山寺を華嚴宗の道場として以降、自身のことを表す時に頻繁に用いたのが「沙門・非人」という肩書きであった。

高山寺典籍文書綜合調査団が編集した「明恵上人関係語集」にある明恵の著書・書写本を見てみると、建仁元年頃までの明恵の署名は、「金剛仏子成弁」「大法師成弁」「成弁」が多い。しかし、建仁二年から元久二年頃には、「非人成弁」「沙門成弁」の署名が

見られるようになり、建永元年十一月二十七日に高山寺に移って以降は、奥書に署名のある書物二十二点のうち、「沙門高弁（成弁）」の署名のあるものが十七点、「非人高弁」の署名のあるものが三点を占めるのである。

本稿では、『華嚴縁起』『元暁絵』第一巻の詞書について『宋高僧伝』『唐新羅国黄龍寺元暁伝』との比較を行い、元暁に関する記述を実際の明恵の姿に近づけ、絵巻の観賞者が明恵を元暁に投影しやすいようにした可能性のある変更部分について論じた。本発表で省いたものも含め、当該部分は、六箇所に及び、いずれも細かな点であったが、考察を深めることよって、『元暁絵』の制作者に明恵と元暁を重ね合わせる意図があったとされるこれまでの学説に一つの裏付けを与えられたと考える。

#### ■後輩の皆様へ

卒業論文執筆にあたっては、とにかく早め早めに進めていくことが重要です。論文の冒頭から書くことにこだわらず、資料が揃った部分からどんどん文章化していくのがよいと思います。

まだテーマを決めていない方は、興味のある作品の先行研究を読んでみて下さい。先行研究を読むことで、その作品について

どんな研究が行われているのか、検討の余地があるのはどんな問題なのか分かってきます。また、先行研究の参考文献には、GZBに載っていない論文等が掲載されていることもあるので、注意して読むようにしてください。

そして、卒業論文でも参考文献は必ず明記しなければならないので、先行研究の書誌情報もコピーをとるかメモしておくとうです。

充実した一年間を過ごされ、これまでの学びを締め括られることを願っております。

#### 鈴木三重吉「ぼッぽのお手帳」論

——〈家〉と〈女〉を中心に——

湊川 智世

鈴木三重吉の唯一の創作童話である「ぼッぽのお手帳」の、〈家〉が子供を生むという表現について論じる。先行研究では「母性無視」である、または「理にかなった表現ではない」と言われるこの表現を三重吉が選んだ理由を、主に小説作品と作品への実生活の影響という点に注目して探っていく。

三重吉は幼い頃に母を亡くした後、祖母や叔母等複数の女性と共に生活する環境に長く身を置いていた。そして三重吉の小説全

七十四編中、その女性たちがモデルとして登場しているものは十七編にも上る。特に幼少期を共に過し初恋の相手でもあった従姉や、亡くなった母代りであった祖母の登場回数は多く、実生活が強く作品に影響を及ぼしていることが窺えた。

また三重吉の小説には、男性が常に〈理想の女〉を追い求めているものが九編存在する。妻や恋人など身近な女性では満足できず、常に想像の中で作りあげた〈理想の女〉を求めめるのである。そしてこの点も現実の生活環境が作品に影響を及ぼしているのと同様に、三重吉自身の考えによって表れたものであることが随筆から窺うことができる。三重吉は〈母親のような女〉が自分の〈理想の女〉であると述べ、小説の登場人物と同じくそれを求め続けている。〈母性無視〉とは反対に「母性」を強く求めている姿が浮かび上がっていた。

しかし三重吉の〈理想の女〉とは、出産によって母となる女性ではなかった。小説の中でも随筆でも三重吉は女性が子供を持つことに否定的である。その理由としては「〈理想の女〉はただでさえ手に入らないにも関わらず、女性から若さや魅力を奪う子供は現実の女性を〈理想の女〉に仕立てようとするのに対しては、むしろ障害となる」「自分を母のように受け入れてくれる女性を求めていた三重吉は、〈理想の女〉から女性が遠ざかると共にその〈母性〉

が自分ではなく子供に向けられることを許さなかった」といったものが考えられた。三重吉の〈理想の女〉とは〈母親のような女〉であり、それは〈子供を慈しむ母〉ではなく〈自分を愛する母〉だったが、三重吉は実生活でも作品の中でもついにその〈理想の女〉を手に入れることはできなかった。

〈家〉が子供を生むという表現は、「母性無視」のではなく反対に強く〈母性〉を求めた結果なのではないだろうか。一人の女性として〈理想の女〉を手に入れられなかった三重吉は、複数人の母性を〈家〉に託すことによって〈家〉に〈理想の女〉の役割を与えたのではないか。三重吉にとつて〈家〉とは常に〈女〉が存在するものであり、それは母や妻一人に限ったものではなかった。そして「ぼッぽのお手帳」では一人の妻に出産の役目を持たせるのではなく、複数の女性に望まれた結果〈家〉が子供を生むこととなった。

最後はより現実的な問題として、長女すゞ誕生時に同時に二人の妻を持つ状態になっていたことの影響を主に書簡を通して論じた。後に二番目の妻となるらくが大正五年六月に長女すゞを出産、同年七月に当時妻であったふぢが病死しており、当時三重吉はこの事実を世間に知られないよう親しい間柄の者にまで隠していたことが分かる。そのため〈誰がすゞを生んだか〉という問題を、

作中で〈家〉が生んだと表現することによって読者の目から逸らしてしまつたのではないだろうか。また親友へ宛てた書簡では病死した前妻に残る三重吉の思いや配慮が感じられるものもあり、この点が〈家〉が子供を生むという表現へ繋がつたとも考えられる。複数人の母性の集合体である〈家〉ならば、そこへ亡くなつた前妻を重ねることも可能だからである。

今回は主に三重吉の小説作品と実生活を通して〈家〉と〈女〉の問題を考察したが、当然のことながら「ぼッぽのお手帳」は童話作品であるため、他の童話作品との比較検討によつても新たな見解が導き出せると考えられる。

私は卒論に必要な「新見」を有名な作家や作品を研究した場合見つけられる自信がなかつたため、先行研究がほとんど存在しなかつたこの「ぼッぽのお手帳」という作品を研究テーマに選びました。参考資料の少なさには苦労するかと思いますが、こういった他の人があまり手をつけていないものを選ぶと比較的自由な発想ができ、自分の考えがそのまま新見となる可能性が高いため研究のしがいはあると思います。

卒論執筆中は就活やアルバイト等との両立が大変ですが、毎日全てをこなそうとするのではなく「今日は卒論に集中する、明日

は就活を頑張る」といったようにメリハリをつけると気分転換にもなつて良いと思います。また早い時期からしっかりと計画を立てて進めていくことが大切ですが、卒論は自分の好きなことを思いきり研究できる数少ない機会だと思つので、どうか息抜きも忘れず楽しんで執筆して欲しいと思います。

### 〈長所〉と〈所長〉

#### 〜二字漢語の字順の反転に関する若干の考察〜

北原 慈子

卒業論文の題材として、私はかねてより興味があった、二字漢語における字順の反転現象を取りあげた。字順の反転とは、近代の日本語に特に多く見られた現象で、漢語〈A B〉が〈B A〉に反転することをさす。具体的には、〈華麗〉に対する〈麗華〉、〈抵抗〉に対する〈抗抵〉のようなものである。当該問題に関する先行研究は多数存在するが、そこにはある偏りがみられる。その偏りとは、漢語〈A B / B A〉における意味や位相の違いにばかり注目し、漢語をとりまく語法等の問題を排除しがちである、というものである。そこで私は、その偏りから外れた漢語群に焦点を当てるところにした。すなわち、先行研究において反転現象の一例とされている、〈長所〉と〈所長〉である（どちらにも「優れているところ」



の意)。

この〈長所〉と〈所長〉の関係を調べるにあたって、二つ押さえておかねばならない事実がある。一つ目は、〈長所〉と〈所長〉では〈所〉のもつ役割が異なるということである。つまり、前者では「ところ、点」という名詞的な意味で用いられているのに対し、後者では助字として用いられている。助字とは、漢文における付属語のことである。〈所〉については、「所有」「所存」などの形で残っており、訓読では「くするところの」とよむ。〈所長〉もこのグループに属する。こうした違いを踏まえると、〈長所〉と〈所長〉は、先行研究が区分しているような単純な反転語ではない、ということが推測されよう。

もう一つ、押さえておかねばならないことがある。それは、〈長所〉という言葉の存在である。漢語の起源を多くもつ中国語においては、〈所長〉は存在するが、〈長所〉は存在しない。〈長所〉の代わりに存在するのは、〈長所〉である。対して日本語においては、〈長所〉と〈長所〉は、基本的に同じものとして扱われている。この違いは、〈所〉と〈所〉という二つの漢字に関して、日本語と中国語の間で扱いに隔たりがあることに起因する。具体的には、字義・字音に関する違いである。まず字義については、中国語の〈所〉には“point”の意味があるが、〈所〉にはそういっ

た意味はないと考えられる。それゆえ、「チョウショ」を「優れているところ」、つまり“a strong point”や“a good point”の意味で使用しようとする、中国語では〈長所〉の表記を用いなければならぬ、ということになる。一方、日本語では〈所〉と〈所〉のいずれにおいても意味は変わらない。〈長所〉でも〈長所〉でも構わないのである。また、字音については、中国語では〈所〉は「shu4」、〈所〉は「suo3」と発音され、両者は全くの別物である。したがって〈長所〉が〈長所〉の形をとることはそう簡単には起こり得ないと推測される。これに対して、日本語では〈所〉と〈所〉のどちらも「ショ」と発音される。それゆえ〈長所〉と〈長所〉が混用されても不思議はない。

こうした観点を踏まえて、改めて〈長所〉と〈所長〉の関係について分析してみると、以下のようなことが言える。すなわち、〈長所〉と〈所長〉は、単純な反転関係にあるのではない。両語の間にはまず、〈所〉が助字的役割を果たしているか、名詞的に用いられているかという差異が存在する。更に、両語の間には、〈長所〉という語形が介在しており、そこには名詞としての〈所〉と〈所〉の字義の差異、字音の問題が、日本と中国の間で複雑に絡まりあっている様相が見てとれる。字順の反転はその表面的な結果にすぎないと考えられるし、むしろ反転の関係にあるものではない、と

言うべきである。

ここに見てとれるのは、日本人が漢語に触れる際、中国語をごまか意識していたか、また認識し得たかという問題である。これは、従来の偏りのある研究からは見出し得なかった視点である。してみれば、従来の研究は、この新たな視点を踏まえた上で、再考する必要があると考えられるのではないだろうか。

以上が、私の卒業論文の概観である。この研究を通して、私は幅広い視点を持つことが非常に重要であると実感した。というのも、当初私は漢語の研究をするにあたり、中国語の知識を活用するつもりはなかったからである。しかし、いざ研究をはじめてみると、中国語や時には英語の資料も電覧する必要がでてきた。また、今回は特に挙げていないが、研究資料として国語学とは全く関係のない、古い法律の文章をみることもあった。このような作業に戸惑ったことがないといえれば嘘になる。しかし、これらの過程を経たからこそ、自分なりに満足のいく卒業論文になったとも感じている。したがって、これから卒業論文を作成される京都女子大学の学生の皆様には、是非専門分野以外のことに興味をもち、それらを積極的に吸収し、論文に活かして頂けたらと思う。

## 大江以言の詩文表現

### ―「詩境」の語を中心に―

田 中 理 子

大江以言（九五五〜一〇一〇）は、平安中期に活躍した詩人である。『和漢朗詠集』には彼の詩が十一首採られている。修士論文では、『和漢朗詠集』九月尽部に収められている「秋未出詩境」詩を中心に以言の詩の特徴について考察した。修士論文は四つの章で構成し、その中の第一章から第三章では「詩境」の語を取り上げた。本発表ではこの「詩境」の語を取り上げた。

「詩境」の語は白居易の詩に二例あり、どちらも詩を作りたくなる気持ちを表わしている。本朝では「詩境」という仮想空間を描いた大江匡房（二〇四〜一一一一）の「詩境記」がよく知られている。

第一章では「詩境」の語を、詩を作りたくなる気持ち、文場、仮想空間の三つに分類した。詩を作りたくなる気持ちは白居易の詩に見え、文場としての「詩境」は以言以前の本朝の詩人も詠んでいるが、仮想空間としての「詩境」は「秋未出詩境」以前には見つけることができなかった。「秋未出詩境」の「詩境」はこの三つの要素を持っており、仮想空間の「詩境」は以言にはじまるものだと考える。

第二章では仮想空間の「詩境」が何によるのかを考えた。先行研究で、匡房の「詩境記」が、王積の「醉郷記」を利用したことが指摘されている。しかし「境」と「郷」では字が違うため、直接「醉郷記」から「詩境」が連想されたとは考えにくい。匡房は『江談抄』の中で、「秋未出詩境」について論じており、以言の「詩境」から「詩境記」の語を用いた可能性がある。

白居易の「詩境」使用の一つに「將至東都先寄孤留守」詩がある。「醉郷記」の「醉郷」の語を利用した白居易は「醉郷」の対に「詩境」を詠んだ。白居易は「醉郷」と「詩国」という対も詠んでおり、これは慶滋保胤(？)一〇〇二が利用している。以言も白居易の「醉郷」と「詩境」の対を利用し、「詩境」という仮想空間を描いたようだ。

第三章では仮想空間としての「詩境」がどう描かれたのかを考えた。それを考える上で重要なのが『和漢朗詠集』三月尽・九月尽の部である。「三月尽」は白居易が三月尽日に惜春の想いを高め、擬人化した春を詩に詠んだ。「三月尽」は菅原道真(八四五〜九〇三)らによって日本漢詩に受容され、「九月尽」を生み出した。

『和漢朗詠集』三月尽部には道真の「送春」詩が収められている。この詩は白居易の「三月尽」と、「醉郷記」の発想を利用してい

ることが指摘されており、匡房以前にも「醉郷記」が読まれていたことが分かる。

『和漢朗詠集』には道真の「送春」詩に倣った作が三月尽部(橘在列)、九月尽部(源順)に収められている。在列も順も道真と同じように去り行く春または秋を擬人化し、しかし季節は人ではないので留めておくことはできないと言う。両者の詩のポイントは人に仮想した季節を現実世界の関や城で留めようとするが留められないという点にある。

在列と順の詩とは異なり、人に仮想した秋が仮想の空間に留まっているというのが『和漢朗詠集』九月尽部に載る以言の「秋未出詩境」詩である。以言は詩題の「詩境」に仮想空間と仮定し擬人化した秋が留まる様子を描いた。詩題の「詩境」は第一章で見た詩を作りたい気持ちを表す「詩境」、文場としての「詩境」の意味も併せ持つ。「九月尽」という秋の最後の一日に惜秋の念が高まり、詩人は詩を詠む。「九月尽」そのものが詩を作りたくなる気持ちを起こす「詩境」なのである。その「詩境」から秋が出るということは、「九月尽」という秋の最後の日が終わることを言う。しかし秋はまだ「詩境」から出ていない。その状況が詩人たちに詩を詠ませている。また、そのような日であるからこそ、詩人達は集まって詩会を行う。「九月尽」が、文場としての「詩境」

を成立させるのである。以言の「詩境」の使い方は先行する詩を利用しながら、そこから新しい発想を生み出したと言える。その発想は匡房に受け継がれ、「詩境記」や『江談抄』の以言の「秋未出詩境」詩の評に繋がっていた。

卒業論文は、資料を集めきってから書きはじめようと思い毎日図書館に通った。しかし、書きはじめると集めていたものは不用で、書き進めるたびに新しいものが必要になっていった。どんなにのんびり書いても提出日の一週間前には書き終えて何度も何度も見直すつもりだった。しかし、提出締め切りの三日前、まだまだ余裕があると言いながらキーボードを叩いていた記憶がある。提出日にはほとんど見直しをせずに滑り込みで提出した。読み返したものは誤字が多かった。それどころか同じ文が二回続いたり、切れるはずのないところで文が終わっていたりと、目も当てられないものだった。

卒業論文の反省から、書き進めながら資料を集めることにした。テーマを絞って調べ、少しずつ文にしていくと節ができて、それに近いものを調べて書いていくと章ができた。

資料を集めたりどういう風に論じるかを考えたりすることも大切なことですが、そればかりに熱中せずに、実際に文を書いてみ

ることをおすすめます。

### 春季公開講座（五月十七日）

※講演内容の詳細は前号に掲載。

### 甦る新撰朗詠集の魅力

博士後期課程 今井友子

国文学科の学生でも、新撰朗詠集て何？と思う人が多いのではないだろうか。斯く言う私も、恥ずかしながら大学院の授業のテキストとして使うまでは書名すら知らなかった。遙か昔に使っていた高校の国語副教材『国語便覧』を見ると、文学史年表の平安後期に「新撰朗詠集（藤原基俊）」が記されている。高校生の教材に示されていることは、日本文学史における重要性の現れで、遅きに失した感はあるが再認識をした。

今から四年前の博士前期課程の新聞ゼミでは、柿村重松注『倭漢・新撰朗詠集要解』（昭和六年三月発行）を使用した。柳澤良一先生の『新撰朗詠集全注釈』全四巻が刊行される二年前のこと、八十年以上も前に出版された古書をテキストとして使ったのは、新撰朗詠集の注釈書が柿村注以外にはなかったからである。新聞先生は「これを使って授業を行なっているところは他にないのではないか。もうすぐ柳澤先生が注釈書をだされる。」と話さ

れていた。授業では柿村氏の注釈書を頼りに新撰朗詠集を読み解くのであるが、明治十二年生まれの柿村氏の文章は漢文訓読体のようで難しい。いつも新聞先生に、柿村氏の注釈文の注釈をして頂いた。その時は、柿村注に四苦八苦をしたので新撰朗詠集に魅力を感じるに至らなかった。それから二年後、待望の柳澤良一先生の『新撰朗詠集全注釈』を開けた。全てが美しく、漢詩や歌の瑞々しい声が聞こえてくるようである。また語句の典拠も詳細に示されている。

その柳澤先生の「新撰朗詠集の魅力」の御講演が、平成二十五年五月十七日（金）、本学の国文学科公開講座で開催された。著者にお会いできるのは滅多にない機会である。御講演では、新撰朗詠集の漢詩文五十首・和歌二百首の中から、花鳥風月の表現、友人との別離、故郷の母を思う詩、学問の疲れ、失恋の歌など十五首を紹介された。美しい句は、口に詠ずれば美しく冴えて聞こえるように、柳澤先生のお声は会場に響き、言葉による芸術のすばらしさを話された。御講演後にも新聞先生の研究室で直接お話を伺う機会を頂いた。一部をご紹介すると、『新撰朗詠集全注釈』の大事業を、お一人でされたきっかけは、恩師の金沢大学教授川口久雄先生が「柳澤君がしなさい」の一言であったそうである。それから三十年の歳月をついやされたのは、新撰朗詠集の

美しい写本がイギリスやアメリカにまで流出しており、現存する全ての写本の校合に時間がかかったと伺う。想像以上のご苦労が偲ばれるエピソードである。私たちは柳澤先生のご苦勞の学恩をうけて、八百七、八十年前に藤原基俊の手によって編纂された新撰朗詠集の魅力と感動を味わうことができるようになった。大変有り難いことである。

#### 秋季公開講座（十月十四日）

##### 『萬葉集』の恋の歌』のご講演を拝聴して

博士前期課程 柴 田 清 子

国文学科秋期公開講座において、京都大学大学院文学研究科の大谷雅夫先生より、『萬葉集』の恋の歌』のご講演をいただきました。

まず、江富範子先生より、大谷雅夫先生のご紹介がありました。大谷雅夫先生は、岩波書店の新日本古典文学大系の『萬葉集』の校注者のお一人であるということ、また、単著としては『歌と詩のあいだ』というご著書があるということ、そして、最近では、大谷雅夫先生が校注者のお一人である『萬葉集』が岩波文庫より出版されているということ、等をご紹介いただきました。

『萬葉集』の恋の歌』のご講演は大教室で行われましたが、後

ろの方の席までが満席となり、立ち見の人も出るほどの大盛況でした。

ご講演の中で、『萬葉集』巻四・七四四、「更大伴宿祢家持贈坂上大嬢歌十五首（その四）」に、「われ待たむ夢に相見あひみに来むきといふ人を」という表現があることをお伺いいたしました。これは、「私はお待ちしましょう。夢で逢うために来てくださるといふ人のことを」といった意味になるでしょうか。

大谷雅夫先生はご講演の中で、『萬葉集』には、「思う事を夢に見る」という今日の心理学の常識からは外れる、思われるがゆえに夢を見て、思うがゆえに夢見られる、といった考え方で詠まれた夢の歌が多い、ということをおっしゃっていました。また、『歌と詩のあいだ』というご著書の中でも、

人に思われるがゆえに人を夢に見るという夢、すなわち「思夢」に対して「被思夢」とでも名付け得るそれらの夢は、『萬葉集』に多くしてそれ以後は稀であり、中国文学にはほぼ絶無のものである。古代日本人の夢の本領は、その「被思夢」にこそあったのである。（『歌と詩のあいだ』「夢」二二二頁）と述べられています。

また、ご講演の中で、『詩経』国風には、

有女如玉（女の玉の如きもの有り）

彼其之子、美如英「下略」（彼の其の子は、美しき英はなの如し「下略」）

という詩があることをご教示くださいました。

そして、『萬葉集』巻四・七二九、「大伴坂上大嬢贈大伴宿祢家持歌三首（その一）」に、「玉ならば手にも巻かむうつせみの世の人なれば手に巻きがたし」という歌があることをお話いただきました。この歌は、「あなたが玉だったらしっかりと手に巻き付けようものを、（うつせみの）世の人なので、手に巻くこともできません」という意味になるそうです。また、『萬葉集』巻八・一六一六、「笠女郎贈大伴宿祢家持歌一首」に、「朝ごとに我が見る宿のなでしこが花にも君はありこせぬかも」という歌があることもお話いただきました。この歌は、「毎朝私が見る庭のなでしこの花、あなたはその花であればいいのに」という意味になるのだそうです。

私はふと、真珠がギリシア神話の愛と美の女神であるアプロダイテを象徴するものだとということ、ローマ神話のフローラは春を告げる花の女神であるということ、そして、サンドロ・ボッティチエリが描いた《ヴィーナスの誕生》と《春（プリマヴェーラ）》の二枚の絵画のことを思い出しました。また、ゲーテが作詩をし、シューベルトが作曲をした「野ばら」のことや、サン＝テグジュ

ペリの『星の王子さま』が自分の星に残してきた、とてもわがままな一輪のバラの花のことも思い出しました。女性を玉に喻えたり、花に譬えたりすることは、世界共通であることだなあと感じました。

さらに、大谷雅夫先生はご講演の中で、柿本人麻呂の恋の歌をご紹介くださいました。『萬葉集』巻四・四九七に、「古いにしへにありけむ人も我がわがごとか」とあり、これは、「昔の人もまた、私のように」という意味になるそうです。大谷雅夫先生は、自身の恋の歌を詠ずることにとどまらず、昔から変わらぬ人の心を客観的にとらえようとしている点において、柿本人麻呂の恋の歌は哲学的である、ということをおっしゃっていました。

そしてまた、『萬葉集』巻十一・二三七五、柿本人麻呂歌集の歌に、「我われゆのち後生まれむ人は我がごとく恋する道に遇あひこすなゆめ」という歌があることも、ご紹介いただきました。これは、「私も後に生まれるだろう人は、私のように、苦しい恋の道に遇ってはならないよ、決して」といった意味になるそうです。これは、後の時代の人々も、同じように苦しい恋をするのであろうということをおもって、歌が詠まれているのだそうです。

さすが、歌聖と言われた柿本人麻呂の歌、柿本人麻呂歌集の歌は、哲学的な歌であることだなあと感心をいたしました。

最後になりましたが、大谷雅夫先生には貴重なご講演をいただきました。誠にありがとうございました。

### 公開講座を聞いて

三回生 西中 愛

今回私は、大谷雅夫先生の公開講座を聞き、万葉の時代に生きる人々の文化に触れることができた。

一番印象的だったのは『万葉集』巻四の七四一番「夢の逢ひは苦しかりけりおどろきて掻き探れども手にも触れねば」からはじまった一連の夢の歌である。夢は、現代では人間の深層心理を表すというような心理学的なイメージの強いものとして知られているが、万葉の時代に生きる人々はそれとは全く逆の捉え方をしている、私はとても興味深く感じた。

大谷先生によると、『万葉集』の中で夢を扱う歌は百首程ある。それらは『遊仙窟』という当時中国から伝わっていた伝奇小説の語句を利用して書かれたものが多い。しかし、『遊仙窟』に書かれている夢と、万葉の人々が考えるそれとは少々違う。万葉の人々には、夢に想い人が出てくるのは、相手の方が自分のことを想っているからだという考え方があった。ここに私は独特な万葉の文化が感じられるように思う。『遊仙窟』にはそのような記述はない。

万葉の時代の人々は、当時教養として読まれていたそれを自分たちの文化に結び付けて歌にしたのだとされる。

ここで私が感じたのは、万葉の人たちの柔軟な心である。日本は昔から中国と交流し、文化や知識を取り入れてきている。『遊仙窟』もそれであるが、万葉の人々はそれを鵜呑みにはしない。あくまで「結びつけた」だけである。「結びつける」という行為は、そうした対象にただ影響されてしまうのみではなく、自分たちの独特の文化の特徴を強めることができるのである。

後半で取り扱われたのは恋やつれの歌である。ここで私は「恋」が現代の恋愛感覚とは違い、「孤悲」と表記されるように距離感を強く意識するものであると初めて知った。恋愛経験が乏しい私にはやつれてしまう程の恋情というものがわからないのだが、誇張が多少入っているとはいえず、『万葉集』七四二番の「一重のみ妹が結ふらむ帯をすら三重に結ふべく我が身はなりぬ」のように、帯を巻いている感覚が違ってくるまで痩せてしまうというのは現代には無い衝動ではないか。文通しか連絡手段の無い時代で、届く手紙は数日以上前のもの、また通える距離であるのにもう何日も通ってきていなかったり、もしくは噂で別の異性のもとに通っているのを聞いてしまったら…。そんな物理的にも心的にも「離れている」ことに強く感情を揺さぶられる「孤悲」という感情も、

ひとつの文化ではないかと私は思う。

大谷先生の話は非常にわかりやすく、知識の乏しい私にも易しいものであっただけでなく、万葉歌への関心を一層強く抱かせる講義だった。これからも『万葉集』について探求していきたいと思う。

### 春季国文学会旅行「京の“へそ”から本能寺へ

—信長命日そぞろ歩き—（六月二日）

#### 国文学会旅行を終えて

二回生 金井 咲樹

私は京都女子大学に入学してから、歴史ある京都という土地を利用して、友達と寺社巡りをするが多くなりました。今回の国文学会旅行では、私がまだ訪れたことのない京都ゆかりの地を訪れるということで、ぜひとも参加したいと思ひ学会旅行に申し込みさせていただきました。

今回の学会旅行で特に心に残っていることは、六角堂を訪れたことです。六角堂は、紫雲山頂法寺と号する寺で、本堂が六角宝形造であることから、一般に「六角堂」の名で人々に親しまれています。また、六角堂の由来に関しては、「続古事談」を使つて中前先生に教えていただきました。開基は聖徳太子で、太子が四



天王寺建立の用材を求めてこの地に訪れたとき、靈告によってこの地に六角堂を建て、護持仏の観音を安置したことが始まりだということでした。私は四天王寺や法隆寺を訪れたことがあったので、六角堂の開基が聖徳太子だと知った途端、六角堂を急に身近に感じ始めました。

六角堂にまつわるたくさんのお話を中前先生からお聞きした後、それでは実際に六角堂を上から見てみようということになりました。上から見下ろした六角堂は、その名の通り六角形で、大きく迫力があり、圧倒されました。同時に私は、「でもどうして六角形なのだろうか。六角形に意味はあるのだろうか。」という疑問も感じました。後で調べたところによると、六角形の形にはいわれがあるそうです。次のようないわれです。六角堂の詠歌に「わが思う心のうちは六の角ただ円かれと祈るなりけり」というものがあります。ここで「六の角」とは六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）によって生ずる六欲のことをさします。それらの欲望、煩惱を脱して角を無くし、円満になること。そんな祈りを込めて六つの角を作ったということです。このいわれを知り、仏教に対する人々の熱い思いを改めて感じました。

また、六角堂境内でもう一つ面白いものを発見しました。それは、へそ石です。直径四十五センチの六角形で、中央に直径八セ

ンチの円型のくぼみがあります。私は最初「この奇妙な形をした石は、一体は何なのだろうか。」と不思議に思っていました。中前先生に詳しく教えていただきました。へそ石の名称は、ここが京都の中心地とされたことによるものです。四十五センチの小さな、奇妙な形の石ですが、これが京都の中心を意味していると考ええると、大きな役目をもった石だと思いました。また、この地にへそ石に関して、興味深い話が残されています。六角堂の由来を知るときに使った「続古事談」の資料をよく読んでみると、平安遷都のおり、六角堂の所在が道路の中央にあったので動かそうとしたところ、一夜のうちに六角堂がひとりでに五丈（十五メートル）北へ退き、道路を通すことが出来たということでした。その時に残ったものが堂の礎石である、へそ石にあたるものであり、幕末まで通りの中央にあったということです。先ほど上から眺めた大きくて偉大な六角堂がひとりでに動くとは、どうしても信じられない光景ですが、説話には確かにそのようにあり、面白く感じました。また、幕末までへそ石は通りの中央にあったということですが、「都名所図会」にも、確かにそのように描かれています。通りの真ん中に丸い石が描かれているのは、やはり奇妙でした。ちなみにこのへそ石は、明治十年に境内へ移されたということです。

今回の国文学会旅行では、他にも紹介したい名所をたくさん訪れたのですが、最も心に残った六角堂について、紹介させていただきます。とても楽しく、勉強になった学会旅行でした。参加できたことを、大変嬉しく思います。ありがとうございました。

## 国文学会旅行

↳京の「へそ」から本能寺跡へ

二回生 関 藤 雅 子

今年の国文学会旅行はまず初めに、京都の「へそ」と呼ばれるへそ石がある六角堂（紫雲山頂法寺）を訪れました。平安京造営の際、六角堂が道の真ん中にあり邪魔だったため、移動することを祈願すると、六角堂自らが、一夜のうちに北へ移ったという伝説があるそうで、非常に驚きました。また、私がとても印象的に感じたのは十六羅漢です。にこにこした顔がかわいらしかったです。この羅漢様は「和顔愛語（わがんあいご）」を実践し、いつもにこにこしているそうです。

その後、高松神明神社に行きました。源高明や後白河天皇などの邸宅だったそうです。

またその後、少し歩いて、京都市指定有形文化財である紫織庵を訪れました。紫織庵は京のじゅばんと町屋の美術館です。紫織

庵には非常に興味深いものがたくさんありました。まず、紫織庵は京都の伝統的な大堀造建築の代表例です。洋間などがあり、和風のなかに洋風が取り入れられた建築様式でした。建物のなかには、見学日に特別にみることでできたのですが『洛中洛外図屏風』の実物が飾られていました。手で触れられるほど間近で作品を楽しむことができました。また、この紫織庵の窓ガラスは、すべて「波打ちガラス」という手作りのガラスで、今現在、そのガラスを手作りする技術は本当に少ないらしく、窓ガラス一枚あたりの価値は家を一軒買うことができるほどのものでした。二階部分には和服下着の一種である長襦袢が展示されていました。明治時代から大正時代にかけてのものがあり、それぞれ柄が特徴的で興味深いものばかりでした。昔のものでも、ミッキーマウスの柄があったりして、現代の私たちが見てもおしゃれなものでした。また、戦時中の長襦袢は、そのころの社会を表すように、戦闘機の柄だったりしました。そのほかにも、紫織庵には洋間や茶室など見どころがたくさんあり、とても感動しました。

そこから、また歩いて亀龍院にいきました。亀龍院では、亀にのった薬師如来、「亀薬師」を特別に拝観することができました。

そして、学会旅行当日は織田信長の命日だったのですが、この日にオープンした「信長茶寮」に行きました。信長茶寮は旧本能寺

の一角にありました。店の地下一階には信長の慰霊碑が設けられていて信長詣ができるようになっており、信長グッズが売られていたり、墨絵などが展示されていました。

信長茶寮のあとは、今回の学会旅行最後の目的地である、本能寺跡へいきました。そこには小さな石碑がたてられているだけで、すこしわかりにくいところになりましたが、本能寺跡を確認できてよかったです。

今回の学会旅行で、普段自分だけでは、あまり行くことがなさない、小さな神社や石碑なども見学することができて、とてもよかったです。京都では、ひとつひとつの場所に歴史があることが今回よくわかりました。せっかく京都の大学生なのだから、これからも京都のさまざまな場所を訪れ、その歴史を知っていかれたら良いと思いました。

## 秋季国文学会旅行「京都の秋に旧邸をめぐる」

(十一月十日)

### 京都の秋を堪能

三回生 古家 友希穂

十一月十日、ずっと心待ちにしていた秋季国文学会旅行「秋の京都に旧邸をめぐる」へ参加した。不安定な天気が続き、傘をさ

したり閉じたりせわしなかった。

京阪神宮丸太町駅から出て、鴨川を挟んだ向こう側に周りの家とは明らかに違うつくりの建物が見えた。賑やかな道路から一本入ったところには、知らなければ通り過ぎてしまいそうな入口がある。そこから京都独特の奥に長く伸びた通路を抜け、木に囲まれた中にあるのは頼山陽こだわりの茶室「山紫水明処」だ。茶室の中は五畳程度で、案内されて茶室に入ると、十六人が座るには少し窮屈だった。開けられた窓からは東山がみえ、すぐ近くに鴨川が流れていた。係りの人の説明が続く中、遠くからは子供の笑い声が聞こえた。時間がゆっくり進んでいるような気持ちになった。しかし、正座をした足の感覚がなくなるほどの痺れから確実に時間が過ぎていくのを実感した。

その後京都市歴史資料館を見学した。伏見・淀の古地図が展示してあった。見慣れない地図を見ると今の地図に比べてすごく大まかに書かれているような印象を受けた。地形の変化や街並みの変化はあるのだろうか。伏見・淀は馴染みがないため今と昔の地図を並べ比べてみたいと思った。勉強したはずであるが、読めない字がちらほらあった。

廬山寺では、特別公開と源氏の庭や貴重な資料の数々を見た。特別公開されている元三大師堂の中は薄暗かった。係りの人から

織田信長から焼き討ちに遭いそうになった廬山寺が当時の人々の努力によって難を逃れ、現在まで続いているという話を聞いた。もし、信長の焼き討ちにあつていればもうこの世の中に存在してない伝説の寺になつていたかもしれない。今私たちが源氏物語に縁のあるとされている寺を訪れ、庭、資料を見ることができて、いることが奇跡であるように感じた。

次は梨木の神社だ。梨木神社の学問の神様にお願ひすることといえば京都女子大学の学生としては学業成就しかないだろう。私は必死に拝み、その後少しだけ境内を散策した。

時間の都合ということで、梨木神社から最後の閑院の宮邸跡までは黙々とではあるが、周りの美しい木々をみつっ京都御苑は一気に通り過ぎた。閉門まであと二分ということで目的地に滑り込んだ。閑院の宮邸跡で記憶に残っていることといえばやはり庭である。冷たい風に吹かれて色とりどりの落ち葉がひらひらと舞い落ちているのを見たとき、思わず見惚れてしまった。ずっとこの時間が続いてほしかった。たくさんの自然に囲まれ、風が吹くのに合わせて赤、黄、茶色の葉で地面が見えなくなるくらい散り積もつていく光景はとても美しく、ずっと見ていても飽きなかった。

「秋の京都に旧邸をめぐる」ツアーでは普段の生活を忘れ、自

然の中に身を置いた、私が一年で最も好きな季節である秋が堪能できる旅だった。

### 秋の学会旅行の準備をして

一回生 堂園夏帆・脇坂 彩

今年の秋の国文学会旅行の計画を私達は担当しました。私達にとつては何もかもが初めてのことで、とても緊張しました。まず、最初に私達がしたことは、行き先を決めることでした。ガイドブックを見て、行きやすく、国文に関係がある場所を選びました。その時が、私達にとつてはちょうど忙しい時期でしたので、なかなか二人で集まることができず、準備が大変でした。中前先生とも三々四回昼休みやアクティブメールを利用して、打ち合わせをしました。学会旅行のパンフレット作りの際には、訪れる場所のインターネットのホームページを利用しつつ、なるべく見やすく、且つ、訪れる場所のことがよく分かるようにと心がけました。下見をした時、私達は当日にちゃんと案内ができるようにする為に申込書に書いてあった場所の順番通りに行きました。私達も行くのが初めてだったので、地図で何度も現在地と目的地を確認しながら行きました。二人とも方向音痴なので何度も迷いかけ、大変でした。地図をもっていました、距離が分からなくて何度も不

安になりました。京都御苑を訪れたときには、あまりの広さに驚いて、途中で休憩をはさみながら歩きました。

当日は、あいにくの雨模様でしたが私達が想像をしていた以上に大勢の方が来てくださってとても嬉しかったです。先輩方もいらしていたので、緊張しました。下見の時は大変でしたが、当日は道を間違えたりせずに順調に進められて良かったです。しかし、準備がおろそかなところもあり、案内役でありながら先生方に時間配分を任せたり、頼る場面が多かったので、反省しています。一番の反省点は京都御苑でのことです。京都御苑には閑院宮邸跡があり、午前九時〜午後四時半まで参観可能で、受付は午後四時まででした。当時、三番目に訪れた蘆山寺のところで少し時間をとりすぎてしまい、遅れが生じてしまいました。その結果、京都御苑につくころには、閑院宮邸跡の受付時刻がギリギリにまで迫っていました。京都御苑に入った場所から閑院宮邸跡までにはかなり距離があったので、私達は急いでそこに行きました。何とか受付の時刻には間に合いましたが、説明も全然なく、私達の歩く早さについていけない人も何人もいたので大変申し訳なく思っています。

準備などが大変で反省点や至らなかつたところが多かったです。が、最後まで参加者の方々は私達の説明をきちんと聞いてくだ

さつたのでうれしかったです。初めてのことばかりでしたが、私達にとって良い経験となりました。

### 新入生歓迎 能楽鑑賞会（六月二十九日）

#### 「六百年の重み」

一回生 岩崎 風歌

「能楽」と聞いて、皆さんは何を想像するでしょうか。伝統芸能、古い、堅苦しそう、などの言葉が浮かぶ人も少なくないと思います。私も、実際に能楽を見るまではそのようなイメージを持っていました。しかし、能楽鑑賞会を通して、自分はその中に隠れている楽しさや面白さを知らずに誤解していたのだと実感しました。

私は今回の鑑賞会を通して二つの経験をしました。一つは、「世界観を作り出す」ということです。能楽は謡と楽器が音楽を作り出しています。その中で、私は大鼓の体験をしました。この楽器はより良い音を鳴らすために革を炭火で数時間も焙じるのだそうです。実際に楽器に触れてみると重みがあり、叩けば音が鳴るといふわけではありませんでした。自分の手のひらで振動を止めないようにし、衝撃による手の痛みと格闘しながら練習をして、舞台いっばいに響く音が鳴った時はこの上もない喜びを感じました。大鼓を体験した時に感じた右手のしびれこそが、六百年間も

の長い間消えずに残り続けている能楽の伝統の重みなのだ、と感じました。また、能の演者は感情を表す際に現代のように激しい動きはしません。扇の開き方や歩き方、手の動きなどの基本に忠実な動作が流れるように美しく行われることで登場人物がいきいきとし、能の静寂な世界を作り出しているのだと知りました。

もう一つは、「本物に触れる」ということです。演目の前に、普段私たちが見ることが出来ない能の装束の着付けの様子を目にすることが出来ました。能楽の装束は唐織と呼ばれる豪華で高価なものです。着物をひもで締めた時に聞こえたギシギシという衣擦れの音は、「すべて絹でできた本物」でなければ聞くことはできなかつたでしょう。

能も狂言も、話す言葉は今と違い、音楽やリズムも現代とは違います。でも、それを気にせず一度頭をからっぽにして目の前の芸術に集中することで、その世界に入っていくことが出来ると実感しました。何もなかった舞台上に謡の聲が響くだけで空気が重々しく震えそれが全身に伝わり、演者が着物の袖を振り、足を力強く踏み鳴らすことで、演者が何を表現しようとしているのかを観客に想像させているのがわかりました。

私たちが狂言を見て口を開けて大笑いし、能を見て感動する姿は六百年前の人たちと変わりません。どれだけ年月が経っても良い

芸術作品は色褪せることなくその魅力を伝えてくれるものです。しかし、どんなにすばらしい作品だったとしても知ろうとしなければ魅力には気づけません。私たちにはそのような作品の持つ魅力を次の世代へとつなげる必要があると思います。私を能の世界に引き込み、面白さに気づかせてくれた、「橋弁慶」の主人公の牛若丸は、私よりもずっと年齢が低い子方と呼ばれる少年でした。彼は私たちよりも能楽の面白さや楽しさを知っているのだと思います。「百聞は一見に如かず」であり、能の楽しさをまだ知らない人に、まずは一度作品を見てほしいと思いました。

### 伝統芸能に触れる

一回生 岡 畑 有 希

この度は、新人生歓迎会として能楽鑑賞会を行っていただきました。私は恥ずかしながら、このような伝統行事にはほとんど触れてきたことがありませんでした。そのため、全く何も感じ取れず、何時間もぼんやりと無駄に過ごしてしまつたらどうしようかと少し不安に思いました。しかし、そんな心配は杞憂に終わりました。それは、先生方の事前の説明に加えて、能楽師の方も、狂言師の方も分かり易く、親しみやすい内容を交えながら説明をしてくださつたからです。舞台上でお話しをされると、少し緊張し

ていた学生たちの雰囲気解れていくのを感じました。

最初にお話をされたのは、能楽師の方でした。お話をされながら、普段は舞台上では決して行わない役者の着付けを実演してくださいました。モデルの方に、色とりどりの着物を纏わせ、一つ一つの意味のある装飾品をつけていく様子は、淡々としているように感じて、伝統文化に対する敬意を表していました。着付けの実演が終わると、そのままそのモデルの方の仕舞を見ることになりました。すると、いままで朗らかな口調でお話をされていたかたが静かに、「何も考えずに、じっと舞台だけを見てください。きつと、そこに何かしら感じるものがありますから。」とおっしゃいました。そう言われ、素直にじつと舞台だけに意識を集中させてみました。能楽の織り成す空間に身を任せると、日常を忘れられる気がしました。

次にお話をされたのは狂言師の方でした。最初から、明るすぎるくらいのお話と口調でしたが、この快活な雰囲気が狂言なのだとおっしゃいました。そして、悲しみやつらさを吹き飛ばすような笑い方、話し方を教えていただきました。一緒になってやっているうちに、なんだかとても愉快な気分になりました。今思えば、決して面白い事が発端となって湧き起こった感情ではないのに、なぜこんな風になってしまうのか全く理解できません。ただ、そ

んなことはどうでもいいくらい気分が高揚していたのは確かです。これも狂言なせる技なのかもしれません。最初の能とは真逆の雰囲気が形成されましたが、そんな気分の移り変わりも能楽というものの特徴なのかもしれないと思いました。それから、狂言の仕舞を見ました。ホールのあちらこちらから学生の笑い声が聞こえ続けるそんな舞台でした。能も狂言もいままで感じたことのない雰囲気満ちていました。日常では味わうことのできない、自分の意識がすつと吸い込まれてゆくような感覚がどこか心地良かったです。

鑑賞会後の帰路はすつきりとした気分でした。そこでふと、昔の人々もこんな気持ちになったのかもしれない、決して楽ではない暮らしを忘れたくて能楽堂に通ったのかもしれない、と思いました。今も昔もずっと受け継がれ、思いを大切に込められ現代に生きている伝統芸能、それに携わる人々のおかげで、今日は昔の人々に思いをはせることができました。この永く大きな流れが、人々を惹きつけ、次世代の人々にもこんな風に伝わり、明日を生きる人々を支え続けてくれるのだと思いました。

## 新入生歓迎行事に参加した感想

一回生 堂 園 夏 帆

私は昔から日本文化が大好きで、受験でも文学部以外は目もくれないくらい、大学に入ったら日本文化を学び知識や経験を増やすのを何よりの目標としていたので、歓迎行事というものがあること、そしてそれが能楽鑑賞会だということを知った時の嬉しさは人一倍だったと自負しています。

ちよと、高校の時、作者さん自体も昔から大好きでとてもはまっていた漫画があつてそれがお能についての漫画だったので、興味は尽きなかったのですが、今まで機会に恵まれず一度も見ただことはなかったの、余計に楽しみで仕方ありませんでした。このような場を与えてくださった先生方や関係者の皆様にはもうもう大感謝です。

能楽師の皆さんはどなたも素敵に良い声で、話し方もお上手なのでうらやましくなるくらいでした。私なんかは何を思ったか落研に入ってしまったので見習いたいと思いました。前の日楽しみすぎて寝不足だったのと、良い声の説明が滔々とつづくのとこのころ夢の国に飛びそうになっていました。それでも話し上手と、雑学や裏話まで聞かせてくださったサーピス精神に助けられて、あだ名が「上の空」だった私でも集中して楽しくお話を聞

くことができました。

特に驚いたことは、私たちの先輩がプロの能楽師さんになっていらつしやるということでした。なぜかお能は男性しか舞台上に立てないものだと思ひ込んでいたので、皆さんもなろうと思えばなれるんですよ、はなんだか素敵だと思いました。最初、先輩の着ていらした着物の着付けがなんだか変わつていて男の人みたいで、何か意味があつたのか聞いてみたかったです。質問コーナーのようなものがあるのかと思つたらなかったので、それは少し残念でした。

衣装と言えば、お能の装束の着付けが見られたのは本当に本当に幸せでした。言葉は悪いですが、割と普通のおじさまがみるみるきれいな女のひとに変身していつ、最初はよくわからなくて首をひねっていたのに最後は驚くくらい素晴らしく女性そのもので、魔法みたいで感動したのを覚えています。衣装自体も一枚一枚見せていただけで、それぞれがとても高価で貴重なものですがごく綺麗で眼福つてこういうことか！と感じました。普通の着物と違うところも多くて、着付けの勉強中なのでとてもためになって私にとってはいろいろお得なコーナーでした。

和楽器体験も確かに貴重な経験で、ああいうのも好きなんです。が、あの感じというか全力ですべったので割と忘れたい経験に：



人前に出るの得意じゃないのに…一組のふたりがすご過ぎてえっ  
私ら要る？ってなりました。弾いてらっしゃる方を見るのは格好  
良くて楽しかったです。

お能もかっこよくて牛若の子はかわいくてとても素晴らしかつたのですが、狂言は面白くて楽しくて私は狂言の方が、気になつて仕方なかったからかもしれません、強く印象に残っています。もつと難しいのを想像していましたが、ちゃんと話は分かりましたし、狂言の会話のノリなんかは今のお笑いなどにも通じるものがある、違うようでも繋がっているんだなあと思いました。昔の人でも今の人もやつぱり同じ日本人なんだなと思えてなんとなく嬉しくなりました。あのお酒を飲むところのやり取りなんてものすごく笑いを取っていましたし、あの間やテンポは今の人間でもすごく参考になりました。というか参考にすべきだと思えました。

長々と失礼しました。読んでくださってありがとうございます。  
まあでも一言でまとめると、とってもとーっっても楽しかった!!です。

## 新入生歓迎行事に参加して

一回生 脇坂 彩

能楽鑑賞会をして私が驚いたことは、着付けの大変さでした。一人の役者の着付けをするのに、三人がかりで行っていました。衣装を役者に着せたり、能面をつける時に紐の強弱を調節したりと大変そうでした。能面は写真やテレビでしか見たことがなかったのですが、実際に見てみると思っていたよりも小さくて意外でした。

一番印象に残ったことは、学会委員として小鼓・大鼓の体験に参加したことです。二組の私は小鼓を体験しましたが、鳴らしたことがあつたので実物は見たことがあるのですが、鳴らしたことはなかったもので、皆が見ている前で上手く音が鳴るかかわからず、とても緊張しました。京女の卒業生で現在能楽の後見をしていらつしやる松井美樹さんに教えていただいた小鼓を鳴らしてみたいのですが、思った以上に鳴らすのが難しかったです。松井さんに右手の指先で叩くようにと教えてもらったのですが、思ったように音がでなくて大変でした。後で祖母から聞いたのですが、小鼓の音がちゃんとできるようにするのも何年も練習が必要であるみたいです。また、小鼓自体はそんなに重さはなくとも、独特な持ち方をするので持っているときに腕が疲れてしまいました。小鼓は、調べの緒と呼ばれる紐を打つときに締めたり緩めたりして

音の調子をとる打楽器なので力も必要でした。小鼓と大鼓は大きさが一回りほどしか変わらないのに、使われる素材が違うだけでまったく違う音がでたので興味深かったです。演奏しているのを見て聞いているのと、自分が演奏してみるのは感じ方が異なり、ただ見て聞いているだけではわからない面白さや演奏する難しさを感じることができて楽しかったです。

新入生歓迎行事の前に水一の国文学基礎講座の授業で峯村先生から能と狂言について色々教えていただいたのですが、歓迎行事の最後の公演「橋弁慶」が授業で習った「直面もの」でした。直面ものは面をつけずに演じる能で、表情を変えてはならず、面をつける能よりも難しいと習いました。公演中、私はずっと役者の顔を見ていましたが、役者の人達はまったく表情を変えず、視線を変えることもなく演じていました。役者の内一人は子供でしたが、その子も表情を変えずに演じていたのですごいと思いました。「橋弁慶」の見せ場である弁慶と牛若丸の斬り合いは迫力があって物凄く見応えがありました。

新入生歓迎行事に参加して、テレビでは伝わりにくい迫力やすごさを感じました。普段なら決して見ることができない着付けの説明を交えながら特別に見せてもらったり、小鼓と大鼓の演奏をさせていただいたりと、とても貴重な体験をさせていただきました。

た。公演の前に役者の方々が能楽や狂言の説明をしてくださったので今までとは違った見方でみることができました。小鼓の体験に緊張したりもしましたが、私の京女での良い思い出になりました。

## 『女子大國文』 投稿規定

### 一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

### 二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

### 三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

### 四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。

- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

### 五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

六、(投稿先)

投稿先は以下の通り。

〒六〇五―八五〇―一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、

採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

## 編集後記

○今号の査読委員は次の方々です。

坂本信道・中前正志・山崎ゆみ・大谷俊太

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会にて結果を報告、審議の上、四点が掲載となりました。

○前号の充実した頁数の関係で、今年度前期の行事である、優秀論文発表会・春季公開講座・国文学会旅行（春季）・新入会員歓迎能楽鑑賞会についての記事も本号に掲載しています。遅ればせながら、ご一読ください。

○今後とも会員の皆様の投稿をお待ちしています。

（中前・大谷）